

茨城大学学報

第349号

令和2年2月～令和2年3月



卒業生の新たな旅立ちを祝して・・・

INDEX

- ◆ 女性リーダー登用先進企業 茨城県から「優良賞」表彰
- ◆ インドネシア共和国のガジャ・マダ大学と共同オフィス提携に関する協定を締結
- ◆ 【茨城大学・筑波大学】茨城における高等教育の在り方に関するシンポジウムを開催
- ◆ 附属小学校の子どもたち新しい大手門を見学
- ◆ 主体的な学修活動を表彰「iOP-AWARD」
- ◆ 理・中村麻子教授と大学院生が新ベンチャー
- ◆ 令和元年度学位記伝達式を実施 学長告辞・卒業生総代答辞を含む特別映像を上映も
- ◆ 学生食堂のスペースを拡充 竣工式開催
- ◆ 教育の質保証の取り組みと成果をビジュアルで紹介する新パンフレット

茨城大学広報室

TEL 029-228-8008

FAX 029-228-8019

◆ 女性リーダー登用先進企業 茨城県から「優良賞」表彰

このたび本学が茨城県女性リーダー登用先進企業表彰の優良賞を受賞しました。2月6日に行われた表彰式には三村信男学長が出席し、大井川和彦知事から表彰状を手渡されました。

この制度は、職場においてリーダーとなる女性人材の育成や管理職・役員への登用促進に積極的に取り組み、登用実績が優れている企業等を表彰するものです。

本学では2016年度にダイバーシティ推進室を開設し、女性教職員を対象としたリーダー研修の実施、男性を含めた学内全体の意識改革等に取り組み、女性のキャリア形成と上位職への登用の成果をあげています。女性管理職割合 21.3%、女性役員 1名といった結果が評価され、今回の受賞に至りました。



大井川知事（左）から表彰状を手渡される三村学長

◆ インドネシア共和国のガジャ・マダ大学と 共同オフィス提携に関する協定を締結

本学とインドネシア共和国のガジャ・マダ大学は、1月24日、共同オフィス提携に関する協定を締結し、ガジャ・マダ大学内に共同オフィスが設置されました。本学にとっては新たな海外拠点となります。2月11日には、本学の太田寛行副学長および佐藤達雄学長特別補佐、ガジャ・マダ大学からは学長および農学部長が出席し、開所式を行いました。

本協定の締結は、学術交流を促進しつつ教育研究の国際化によるアジア貢献のため、両者間の関係を強化し、両国間の学術・学生交流を発展させることを目的としています。

今後は、共同オフィスを拠点に、共同研究等の活動支援や本学からの派遣学生へのサポートを実施します。さらに、本学へ留学を考えているガジャ・マダ大学の学生への情報提供の場としても活用される予定です。

本学とガジャ・マダ大学は、平成22年に大学間交流協定を締結し、今年で10周年を迎えました。これまでは、本学農学部を中心に学生交流を盛んに行っていましたが、今回の共同オフィス設置を機に、更なる交流の発展やグローバル人材育成の強化が期待されています。



ガジャ・マダ大学に設置された共同オフィス



共同オフィスの看板の設置



開所式後の記念撮影

◆ 【茨城大学・筑波大学】

茨城における高等教育の在り方に関するシンポジウムを開催

本学と筑波大学などで構成する「茨城における高等教育懇談会」は2月19日、「茨城における高等教育の在り方に関するシンポジウム」を筑波大学学生会館において開催し、大学や自治体の関係者など100人を超える参加者がありました。

同懇談会は、産業構造が大きく変化する中、地域の将来ビジョンにおける高等教育の在り方を高等教育機関・自治体・産業界が一緒に考える場として2018年に発足し、今回のシンポジウムは、その初めての主催イベントとして、各界の代表者を招き開催しました。

冒頭、基調講演を行った本学の三村信男学長は、茨城県における18歳人口あたりの学部入学定員が全国平均（0.50人）の約半分に留まっていることなどをデータで示した上で、具体的な連携に向けた恒常的な協議の場として「いばらき地域連携プラットフォーム（仮称）」の設立を検討していると述べ、協力を呼びかけました。

続く招待講演として、大学・自治体・企業の連携に先進的に取り組んでいる「公益社団法人ふじのくに地域・大学コンソーシアム」の丹沢哲郎企画運営委員長（静岡大学理事・副学長）が、コンソーシアム設立の経緯や活動内容を紹介しました。丹沢氏は、静岡県と茨城県との間で置かれている状況が類似していることを指摘した上で、「静岡県には大学課があり、コンソーシアムの設立・維持にも強いイニシアティブを発揮している」と話し、一方で各大学の主体的な取り組みが課題となっていることを報告しました。

後半のパネルディスカッションでは、県内の高等教育機関の学長等から日頃の地域における連携活動の紹介があり、茨城県副知事、水戸市長、つくば市長、産業団体の代表からは、地域が求める人材像やその要請の役割を果たす高等教育機関への期待などが述べられました。

シンポジウムの総括として、筑波大学の永田恭介学長は、「地域を構成する関係機関の代表者が本気で意見を交わす機会が大事。今後もこうした議論を継続していくことと、今回示された具体的な課題についてはひとつでも前に進めていくことを約束したい」と述べました。



◆ 附属小学校の子どもたち新しい大手門を見学

教育学部附属小学校の3年生と3・4年生の複式クラスの子どもたちが2月20日、復元された旧水戸城大手門などの史跡を見学しました。

現在附属小学校がある水戸市三の丸の地域は、江戸時代は水戸城の一角を成していました。その旧水戸城の入口としてそびえ建っていたのが大手門で、このほど高さ13メートル、幅17メートルという大きさを1世紀以上ぶりに復元しました。茨城県産の木材を最大限使用し、工法も当時のものに倣いました。

普段は非公開の門内部へも入って見学し、木の窓から見える弘道館などの風景を眺め、感慨深い様子でした。秋には二の丸角櫓（すみやぐら）もお目見えする予定で、附属小の子どもは、文化財を残す意義をますます身近に学べることになります。



◆ 主体的な学修活動を表彰「iOP-AWARD」

本学は、学生の主体的な学修活動を促す独自の仕組み「iOP（インターンシップ・オブキャンパス・プログラム）」の初年度の取り組みが終了するにあたり、「第1回 iOP-AWARD（アワード）」を開催しました。

本学では、3年次の第3クォーターを「iOP クォーター」とし、必修科目を原則的に開講せず、夏季休業期間とあわせてさまざまな現場での主体的な学修に取り組むための期間としています。学生たちは海外研修、インターンシップ、サービスラーニング、発展学修といったカテゴリに応じて学修活動を行い、報告書の内容に応じて「iOP」の認定を受けます。初めての本格実施となった今年度は、531人の学生が計719件の活動を行いました。

「iOP-AWARD」は、それらの取り組みの中から特に素晴らしい成果をあげた活動を表彰するもので、こちらも初めて企画されました。学生によるエントリー後、書類選考（一次選考）、学生・役員・教職員の投票によるポスター選考（二次選考）を経て7件の活動が最終審査に残り、2月21日に公開選考・表彰式が行われました。

このうち、教育学部の数学選修の橋本花恵さんは、茨城県内の特別支援学校でのインターンシップについて報告し、知的障害のある小学生のクラスでの授業補助などを通じて、「算数を教える前に、その子に他の問題があるかも知れないと考えることが必要」という視点を得たと語りました。

選考の結果、ニュージーランドにおける5週間の海外研修に取り組んだ農学部の宇賀神温さんが最優秀賞を受賞しました。宇賀神さんは、「必修のない期間を設けるという茨城大学の新しい試みのおかげで、海外でさまざまな経験をすることができ、今後の人生に活かせることを嬉しく思う」と述べました。

最後に挨拶をした太田寛行理事（教育統括）・副学長は、「このiOPでの体験をこれからの人生に活かしてくれることが、私たち大学教育を担う者の夢だ。ぜひがんばってほしい」とエールを送りました。



特別支援学校での取り組みを報告する橋本さん



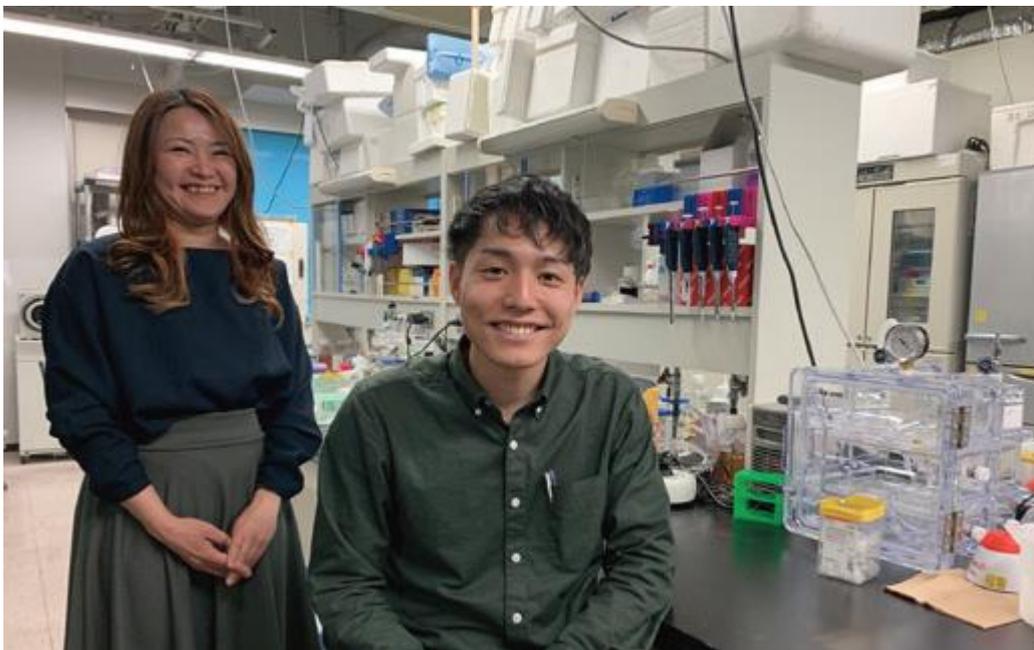
最優秀賞を受賞した宇賀神さんと
三村学長（右）・太田副学長

◆ 理・中村麻子教授と大学院生が新ベンチャー

大学院理工学研究科（理学野）の中村麻子教授と同研究科博士前期課程の高橋健太さんが、3月11日、放射線などによるDNAの損傷評価技術を通じたヘルスケアと安心安全な社会づくりを目指すベンチャー企業「株式会社Dinow（ディノウ）」を設立しました。

中村教授は米国のNIH（National Institutes of Health）で研究員を務めた経験を持ち、H2AXというタンパク質を選択的に染色することでDNAの損傷の程度を評価する技術「H2AXアッセイ」の確立に関わりました。東日本大震災発生から間もない2011年3月に日本に帰国し、福島第一原発事故による放射線の健康被害や被災者の強い心理的不安という事態に直面する中で、DNA損傷評価の普及を通じたヘルスケア事業を構想してきました。

本学への着任後、研究・産学官連携機構などが支援を行い、起業の見通しが立ったことから、同研究室所属の高橋さんを代表取締役CEOとして企業設立が完了しました。今後、「茨城大学発ベンチャー」の称号が認定されれば8社目となります。同社は、DNA損傷レベルのモニタリングを通じて、放射線被ばくリスクの推定、DNA損傷修復能力の測定、DNA損傷をもとにした生活習慣の健康リスクの可視化といったサービスを提供することで、「DNAから“健康”と“安心”を実現する」ことを目指します。今後、DNA損傷評価の基準の策定、誰もが利用できるDNA損傷評価システムの開発といった課題に取り組み、持続可能な事業化を進めていきます。



中村教授（左）と高橋さん

◆ 令和元年度学位記伝達式を実施 学長告辞・卒業生総代答辞を含む特別映像を上映も

本学は3月24日、水戸・日立・阿見の各キャンパスにおいて学位記伝達式を実施しました。本学では卒業式を例年茨城県武道館にて一斉開催していますが、今年度は新型コロナウイルスの感染拡大防止のため卒業式の開催を見送り、学科・コース等ごとに学位記伝達を実施することになりました。今年度の卒業生は1567人、大学院と専攻科の修了者は515人です。

会場では卒業生一人ひとりが名前を読み上げられ、教員から学位記を受け取りました。式の中では、今回特別に制作された学長告辞・卒業生総代答辞を含むメモリアル映像が上映され、卒業生らは感慨深い様子で映像を視聴しました。映像の中で本学の三村信男学長は、「グローバル化は、情報や人などの流動で大きな経済的メリットを生み出す。しかし同時に、格差や新型コロナウイルスのような問題も引き起こす。望ましい次の世界を作る上では、様々な境遇にある人に思いを致し、思いやる心が必要。本学で身に付けた多面的な人間的力を活かし、みなさんには社会で大いに活躍してほしい」と卒業生に向けて激励の言葉を贈りました。



学科・コース等ごとに執り行われた学位記伝達式



各会場で上映された卒業生へ向けた特別映像

◆ 学長告辞

※記念映像において読み上げられた告辞の内容です。

卒業生、修了生の皆さん、卒業、修了おめでとうございます。学業を成し遂げ、この日を迎えられたことを、心からお祝い致します。また、ご家族や関係者の皆様にも、お祝いを申し上げたいと思います。

今回の卒業式は、新型コロナウイルスの蔓延のために、このような形になりました。

中国の武漢（ウーハン）市から始まり、一気に世界に広がりました。21世紀の社会は、グローバル化のただ中にあります。人々の移動によって、一つの地域に現れた新型ウイルスが短期間に世界に広がりました。人、情報、もの、生活様式まで、世界中が繋がるグローバル化の時代に私達が生きていることを改めて認識させられる事態です。

その中でも、人間のあり様にとって、大変示唆的なことが起こりました。日本から武漢市に送られた支援物資に、「山川異域 風月同天」という古い漢詩の一部が添えられていました。「住む場所は異なろうとも、風月の営みは同じ空の下でつながっている」との意味であり、中国の人達の困難や苦労を思い、励ますものでした。それが、中国の人達の間で強い共感を呼び起こしました。

グローバル化は、情報や人、ものの流動で、大きな経済的メリットを生み出します。しかし、それによって、逆に、格差や新型ウイルスのような問題も引き起こします。その中で、経済的、社会的に恵まれない国や人々も残されています。

望ましい次の世界を作る上では、様々な境遇にある人に思いを致し、思いやる心が必要です。グローバル化やAI、ロボット化が急速に進む現在の社会では、逆に、人間らしい、一人一人の価値観やみずみずしい感性が不可欠になっているのです。

茨城大学では「変化の激しい時代を生きる人間力の育成」を目標に教育改革を進めてきました。私は、皆さんが、卒業までの4年間、あるいは、大学院での2年間に、そのような多面的な人間の力を身につけたものと確信しています。

卒業式に当たり、茨城大学で学んだもの、自らの成長を糧にして、社会で大いに活躍して欲しいという思いを伝えたいと思います。

最後になりますが、私の学長の任期もこの3月末で終わりになります。私も、皆さんと一緒に卒業です。本学は昨年、創立70周年を祝いました。次の創立100周年に向かって、より一層、持続的な社会の実現に向けて貢献できる大学へと発展していったと願っています。茨城大学は、皆さんの母校です。皆さんが、うれしい時、悩んでいる時、どんな時でも訪ねてもらえるように、常に門戸を開いて待っています。

皆さんの今後の人生での活躍と、ご多幸を心から祈念して、私の告辞と致します。

令和2年3月24日
茨城大学長 三村信男



◆ 学生食堂のスペースを拡充 竣工式開催

本学の創立 70 周年事業として進められていた水戸キャンパスの福利会館食堂のスペース拡充工事がこのほど完了し、3 月 27 日に竣工式が行われました。

同食堂は学生や教職員、近隣住民などに広く利用されていますが、昼休みの時間帯に利用者が集中し、座席が混雑することが課題となっていました。そうした中、管理運営を行う茨城大学生協同組合（生協）から本学に対して食堂増床の申し出があり、学生の学修環境を改善する提案として本学も賛同しました。創立 70 周年記念事業と位置づけて寄附も募り、スペース拡充が実現しました。スペースは既存の食堂と自動ドアでつなぐ形で新設しました。レンガ風の外観で、床面積 243 平米の空間に 249 席を設置し、コンセントを配備したカウンター席も設けるなど、学生たちの多様なニーズに応えるものとなりました。

竣工式には本学の三村信男学長（当時）や同生協の木村成伸理事が出席し、木村理事は、「学生たちの大学生活の一端を担う生協として増床に取り組んだ。ぜひ多くの学生たちに利用してもらうことで大学の発展に寄与したい」と述べました。

また、新たにスペースを設けるにあたり、生協の学生委員会を中心として愛称を募集するキャンペーンを展開し、その結果、「イーティングcommons」という愛称に決定し、提案した 3 人の学生に表彰状と記念品が手渡されました。

新スペースは 3 月 30 日に仮利用を開始し、4 月 30 日より正式にオープンする予定です。



テープカットの様子（中央左が三村学長、右が木村理事）



拡充されたスペースの内観

◆ 教育の質保証の取り組みと成果をビジュアルで紹介する新パンフレット

本学は、教育の質保証の取り組みと成果をビジュアルデザインによってわかりやすく紹介したパンフレット「茨城大学コミットメントがみえる。」を発行し、あわせてオンライン版も公開しました。

本学は文部科学省の平成28年度「大学教育再生加速プログラム（AP）」テーマV「卒業時における質保証の取組の強化」に採択され、授業・カリキュラム・学部・大学全体という4つの階層による質保証システムを体系化し、さらに学生の入学時、各学年時、卒業時、卒業3年後のアンケート調査に加えて就職先の企業にも調査を行い、充実した教学データベースの構築を進めました。また、こうした質保証の取り組みへの学生・教職員・地域住民の理解と参加を促進するため、「茨城大学コミットメント」というコンセプトを設け、入学式の後に本学のディプロマ・ポリシーや全学的なカリキュラムへの理解を図る「コミットメント・セレモニー」というイベントを行うなど独自の取り組みを実施しています。

今回作成したパンフレット「茨城大学コミットメントがみえる。」は、A2サイズを8つに折った作りで、折りたたまれた紙面を開くごとに、本学のディプロマ・ポリシーや「茨城大学コミットメント」の説明、質保証システムの概説、そしてA2サイズいっぱいに記載された教学データが目飛び込むという構成になっています。教学データを記した面では、グラフやイラストを効果的に使ったデザインを施し、ディプロマ・ポリシーで掲げた5つの基盤学力の4年間での達成率や社会に出てからの活用度、その他の教育環境や学生生活に関する代表的なデータを紹介しています。

太田寛行次期学長は、「AP事業の4年間の取り組みは茨城大学の教育改革を最前線で推進するものだったが、実際にポジティブな成果がデータで示されていることを、楽しみながら理解してもらえるパンフレットができた。学生たちにも関心をもってもらい、主体的な学修をさらに強化した教育システムを展開していきたい」と語っています。

パンフレットは本学の新入生や連携している企業・自治体の関係者などに配布する予定です。

さらに本学のホームページでオンライン版を公開しています

(<https://www.ibaraki.ac.jp/commit/mieru/>)。



新パンフレット「茨城大学コミットメントがみえる。」(手前)を手にする太田次期学長